

日本の医師のなかには、外国人演者を前にした場合、質問されないよう、プレゼンターの視界に入らない位置に席を確保する方もいたりするようです。



こうした現状を知って頂いた

うえで、小井先生に質問させてください。先生は新極真会の事務局長として毎月海外支部に出向かれる以外にも、世界大会などで海外のゲストと接し、外国人の生徒さんもいる空手道場を開いておられるので、英語で指導する機会が多いはずですが、「空手」、「医療」と業界は異なるものの、英会話に対する戸惑いは共通する部分があるのではないのでしょうか。小井先生がこれまでご経験された、英語に関する苦労話があれば、ぜひお聞かせください。

小井: NPO法人全世界空手道連盟新極真会は、現在、世界92カ国に加盟国を持つ団体で、年に7、8回は1週間単位で海外出張して現地で指導や打ち合わせなどをしますから英語は必須です。私はもともと商社勤めだったこともあり、英語の読み・書きに関しては仕事を通してある程度できるようになった実感があります。ところが、空手の指導において大事になるのはやはり話す・聞く部分なのです。

実は、話す力というか英語力が不十分だったとき、空手世界大会のイベントで司会をしたことがあります。隣に通訳者がいて、通訳を通じて話すのですが、言いたいことが感情を込めて全然伝わりませんでした。そんな私の姿を見た関係者から、「まるでロボットみたい」と言われ、すごく悔しい思いをしました。

関: それから、どうされたのですか。

小井: そのイベントの後、悔しくて徹底的に英語の勉強をしようと思ひ、3年ほど英会話に没頭しました。語学学校と、英会話カフェなど英語を話したい人が集まる場所に通い、とにかく毎日英語に触れる時間を作っていました。うちの事務局の周りに自分より英会話のできるスタッフがいたら、悔しい思いをするわけですが、落ち込むのではなく、「英語の上達には、継続あるのみ」と気持ちを切り替えていました。「学習を続けていけば、向上するけれどもマイナスはない」と自分に言い聞かせて勉強していました。

関: 毎日英語に触れるというのは、具体的にどうい

方法がありますか。

小井: BBCの英語ニュースを聞いたり英語教材を読み聞きたりしていました。車の運転中など移動時間でも英語を聞きます。できるかぎり英語がある環境に身を置くようにしました。

日向: 小井先生の実践はすばらしいです。難しい言葉を一生懸命暗記するのではなく、やさしいフレーズを毎日繰り返すことが効果的です。実際、生活における使用単語は、9割が2000語ほどで成立しているという研究報告²⁾があるくらいです。

関: 英会話も空手の基本稽古と同じで、日々の積み重ねですね。

日向: 一方で、医師が英会話につまずいてしまうのは、英語と日本語の言語観の違いを見過ごしがちだからではないのでしょうか。He's an oncologist. やXYZ is a pharmaceutical company. という描写にとどまる言い方より、He specializes in oncology. あるいはXYZ produces pharmaceutical products. のようにactorとactionが明示されるのが英語としては普通の姿です。会話でもactorとactionの視点は大事で、例えば、actorに交代のタイミングがあり、また、action自体にも序盤・中盤・終盤といった構成のあることを意識しないと普通の英語ユーザーの感覚とずれ、ギクシャクしてしまうことでしょう。

会話の中で「Basically」や「Actually」といった、会話の流れの合図を置いていくのも、英会話の上達するポイントです。ライティングでも言えることですが、英会話は始まりと終わりのあるひとつの構築物であり、こうした言葉の標識によって、相手に会話の流れを予告することができ、相手への気遣いになります。これは、会話での作法ないし手順ということでもあります。例えば、冒頭、プレゼンでの質疑応答の話が出ましたが、手順としては、まずは相手の話の中でのどの要素に関わる質問かを明示してから、具体的に質問します。よく見る光景ですが、そうでないと、演説になってしまいます。受ける方も相手の質問を自分の言葉で言いなおしたりしますが、それもコミュニケーションを成立させるためのひとつの手順と言えます。

小井: 「英語を話すのは度胸、聞くのはセンス」と教えられました。実践で勇気を持って話し、相手の言いたいことを感じ取る、つまり聞くセンスを磨くことが

大切だということです。先日、ソフトバンクの孫正義会長の英語プレゼンテーションを拝聴したところ、内容が非常に分かりやすいので説得力がありました。なぜかという、平易な単語を選んでお話をしていたからです。日向先生のお話で日常会話の単語数はそう多くないとありましたが、あの方のプレゼンテーションのように、仕事ができる人ほど、自分本位ではなく、相手に伝えることを優先しているのだと気付かされました。

医療現場で、英会話上達モチベーションがない人をどうするか

関: 医療現場での英会話力の話に戻りますが、そもそも英会話上達に興味がない医師に関心を向けさせて、スキルアップを目指してもらうにはどうしたらよいのでしょうか。そのためには、私自身、私の医局でも回診時や治療方針の会議を英語にするなど、英語を使わざるをえない状況を作っていく必要があると感じています。

日向: 普段は医局で英語を使う機会がありますか。

関: 病院に外国人留学生がいる場合でしょうか。そのときは、会議は全て英語になりますし、仕事をしながら英語を話すこ



とになります。ところが、外国人留学生が帰国すると、とたんに日本語だけの会話に戻ります。それでも医局内で英会話を継続させたいのですが、日本語を標準語としている人の集団ですから、少ししらせるムードがあるのも事実です。

日向: 医師同士3人ぐらいで、毎日勉強会を行うのはいかがでしょうか。複数人で、医療現場に特化した英会話スクリプトを自分たちで作って、医局で共有すれば、すばらしい財産になると思います。複数人で取り組むと、お互いの知識をカバーしながら、英会話力を磨くことができます。また、失敗したときの恥ずかしさも、そこまで強く感じません。この点、大事なのはプロとして通用する話し方をするからです。GoogleのNgram Viewer(書籍を電子化したデータベース)あるいは話し言葉までカバーしている用例

データベースのCOCAで、日ごろから、「どちらが多数派だろうか」「こんな言い方使われるのだろうか」と英語の実際を意識し続けることでしょう。

関: それも一つのアイデアですね。たいていの医師は常に論文を持ち歩いているため、英語を読む機会は多いのですが、話す・聞く機会が取れないのが悩みです。日向先生のアイデアは、そこを克服するきっかけになるかもしれません。個人的には、外国人の患者さんが多いクリニックで診療する機会をつくって、英語で患者さんを診ていました。こうした経験も大事だと思います。

日向: 論文と言えば、学術分野で一般的に使われている言葉かどうかを確認できるGoogle Scholarも

ありますし、いい時代ですよ。
小井: 外国人留学生を招くことや、外国人を採用するというのはどうでしょうか。来日した外国人ゲストを、積極的に医局員の方にアテンドしてもら



もいいかもしれません。
関: とにかく、英語が必要な状況を上司が設定するということですね。確かに、今後も海外からの留学生を積極的に迎えたいですし、医局の先生には国内外の学会発表における英語プレゼンテーションや質疑応答を自発的に行って欲しいです。海外の医師との情報交換やネットワークが、大きな財産になる可能性もあるからです。民間企業では昇進に英会話力が必須となっている会社もあります。将来的には、医師の世界でも似たような状況になるかもしれません。

医師として、世界を相手にするための英会話習得法

関: LCCEの読者の中には、おそらく英会話初級、中級、上級と、さまざまな方がいらっしゃいます。これから医師として世界で活躍していく方に向けて、アドバイスをいただけますか。

小井: まず自分の伝えたいことを、一つで良いので徹底的に研究して、英語で表現できるところまで準備します。私の場合なら、空手の「この技」、精神的な「この部分」などです。そして、実際に使ってみてはい

2) Paul Nation, Learning Vocabulary in Another Language. Cambridge University Press, 2001.